

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	鍛冶田 真生	指導教員 (主査)	杉本 希映

論文題目	ひきこもり親和性における心理的非柔軟性と行動活性との関連 —自閉症スペクトラム傾向に注目して—
------	----------------------------------------------------

本文概要

【問題と目的】ひきこもりは若者の社会参加における問題であり、広汎性発達障害（アスペルガー、自閉性障害を含む）を主とした精神障害との関連が指摘されている（齋藤他，2010）。また、東京都（2008）ではひきこもりの予備軍的存在として「ひきこもり親和群」の存在が確認されている。ひきこもり、ないし親和群が共通して有する囚われ、硬さやこだわりといった特徴は、DSM-5 の自閉スペクトラム症（以下、ASD）との類似が見られる。ひきこもりの支援では、ひきこもりを不快刺激からの回避と捉え、回避に焦点を当てた Acceptance & Commitment Therapy（以下、ACT）による介入が報告されている。ACT で問題とされる心理的非柔軟性（Hayes et al., 2012）に注目し介入した事例では、ひきこもりの行動改善が報告されている（三田村・武藤，2015）。また、ACT は ASD 特性を持つ人に対しても、行動回避を軽減するといった報告がある（阿左見・有光，2013）。このようにひきこもり、ASD 特性のある人々に対して ACT の有効性が示唆されているが、実証検討はされていない。そこで本研究では、心理的非柔軟性（認知的フュージョンや体験の回避）が行動の活性へどのように関連しているかについて、ひきこもり親和性、その背景の ASD 傾向に注目し検討することを目的とする。

【方法】大学生 568 名に質問紙調査を実施した。①行動活性：Behavioral Activation for Depression Scale 短縮版[活性化]項目（山本他，2015）、②認知的フュージョン：改訂 Cognitive Fusion Questionnaire 7 項目版（嶋他，2016）、③体験の回避：日本語版 Acceptance and Action Questionnaire-II 7 項目版（嶋他，2013）、④ひきこもり親和性：ひきこもりへの志向性や理解を示す傾向を測定する質問項目（東京都青少年・治安対策本部，2008）、⑤ASD 傾向：自閉症スペクトラム指数日本版 10 項目版（Kurita et al., 2005）、⑥フェイスシート：性別年齢・不登校経験・ひきこもり経験など、について回答を求めた。

【結果と考察】ひきこもり親和性と ASD 傾向によって全体を 3 群（一般群、ひきこもり親和群、ひきこもり親和・ASD 群）に分けた上で性別、及び不登校経験の有無でクロス集計し、 χ^2 検定を行った。その結果、ひきこもり親和群では女性が、一般群では男性が多いことが示された。また、親和群では不登校経験者が多く、一般群では少なかった。また、3 群と認知的フュージョンないし体験の回避を独立変数、行動活性を従属変数とする二要因分散分析を実施した。その結果、ひきこもり親和群で、認知的フュージョン高群より低群の方が行動活性が高く、認知的フュージョン高群では、一般群よりひきこもり親和群の方が行動活性が低かった。一般群では、認知的フュージョン低群より高群の方が行動活性が高かった。ひきこもり親和群では、体験の回避高群より低群の方が行動活性が高く、体験の回避高群では、一般群よりひきこもり親和群の方が行動活性が低かった。この結果から、ひきこもり親和傾向が強い人々に高い心理的非柔軟性が関連することで、行動活性を抑制することが考えられた。したがって、親和傾向の高い人々であっても心理的非柔軟性に注目した働きかけを行うことで、行動活性が変化する可能性が示唆された。一方、ASD 傾向も高い場合、心理的非柔軟性を通じた行動の活性化は難しいことが示された。ASD を背景に持つひきこもりでは、ひきこもり状態への葛藤が薄い場合が多いといった報告がされている（中野他，2004）。したがって、ASD 傾向が高い場合、自分自身へ客観的な視点を持つことの苦手さがあり、特に認知的フュージョンで示されるような認知的な葛藤や苦悩に対し自覚的に意識されにくいといった背景によって、関連が示されなかったと考えられた。